

龍吟七部集

後猿蓑

四



井上
孫
書

續猿蓑集卷之上

芭蕉

いねらりあつてふゆはるけらる

まのうしに白田あらあし

あまのうしに馬もこのこに母殿モト

あまのうしにうしに映のあまひ

まのうしにあまのうしに月の色

あまのうしにあまのうしに

蕉

祐

里圃

馬寛

沾圃

波柿もさるるをゆにゆれり
 孫う跡とら 祖父り 借涉
 服指れ 髪て ちりる 孫 刀
 煉ふ志あをとも 孫の所
 孫米の 小きむ 一七ヶ 賣にまて
 十里をうらむ 余所へ ちりる
 母の 墓に 山 海 埋て あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

山くく 梅を 海 活 ちりる 柳 坊 せ
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる
 伊勢の 下 面 に 梅 ちりる ちりる
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる
 ちりる ちりる ちりる ちりる ちりる

Journal

11

禪寺に一月あそぶ砂の上
 榎ケヤの角乃ちてぬき丸
 後かしの半に傳ふまゝや
 ちね奴ヌ娘めちく守り花
 月待よ傳ふまゝのころひ
 籬の菊キクはあそぶまはし
 中ナカれて芽メてあそぶのものものも
 伴トモも〜ちかひりりた
 蕉 沓 里 覓 返 蕉 覓 里

削キるにちりねのあしの風
 おもいたはるのまはるのも
 引立てのちかひにのちかひのちかひ
 そとと火入よおとれ 蕉
 花ハナもちやみぬきのちかひ
 潮ウシか〜らのちかひのちかひ
 里 覓 沓 蕉 覓 里

馬寛

雀^{カラ}の字や拵めて梅^{ウメ}の葉^ハ

てら^{テラ}の葉^ハの葉^ハの葉^ハの葉^ハ

さ^サの葉^ハを^ヲ用^ヒて^テさ^サの葉^ハを^ヲ用^ヒて

物^{モノ}の^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハ

葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハ

葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハの^ノ葉^ハ

花圃

里圃

寛

花

里

馬寛

悔はきらぬのしあのかさかた
 後かきんてたまらぬ
 ありては後葉のちかき
 ぬめりきりて四方乃客
 何事もなくしてあつた
 風よこめりあつた
 意所一秋のほろほろ
 一花のさつとあつた

里 苧 里 苧 里 苧 里 苧

伊勢の幸洲のあつた
 世をききぬれり
 借来しきりて
 静かき草一乃
 雪のほろほろ
 志ちぬ合点て
 年しにぬらぬ
 之 隣 寂 び の ち

里 苧 里 苧 里 苧 里 苧

下

汁のあまのこからやぶ子のあまて
あまのこをまきま川刈てと家
にこり寺の栴園をまきま
庭のおまきりあまを麻
隣りてまきまのぬ小高
早下してまきまの新地
肌入て秋にかかりまの月
顔よまきまのまのまの

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

けいを實の母にあまの向て
あまのこをまきまのこ
まのまきまの帷子のまきま
守て氣味よまの枚苗の風
まのまきまのまきまのまきま
あまのまきまのまきまのまきま

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

びびき海よりさゆらぬる南
 みののあさたのちたさくを起
 大根のそとぬ土の畑くれて
 上下のよにねるあのみか
 所切よ月見の頃の集あ殊
 居らちくくとあさるる原

里圃

沼圃
 芭蕉
 馬寛
 流
 里

五ノ上

七

新思彼の響り能く極りて
 片くし能く極り極りて
 想の極りよるまうけなり
 月利ては能くよるまうけなり
 状を極り極り極り極り
 やくし極り極り極り極り
 岸の極りよるまうけなり
 伊弱極りよるまうけなり
 佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

うき旅を馳とつれ立極りて
 色極り極り極り極り極り
 岸舟の極りの中より極り極り
 極り極り極り極り極り極り
 百極り極り極り極り極り極り
 こま極り極り極り極り極り極り
 素極り極り極り極り極り極り
 りの極り極り極り極り極り極り
 佐 寛 里 佐 寛 里 佐 寛

111

折しを冥月の起るまに
 御に加減りちるのおを
 月およもいぬとて
 およひのあはれお
 一るぬ〜 唯り来
 火燵のあけて
 ぶもく〜ひちを
 折さし藤の中り絡線
 里 佐 苾 里 佐 苾 里 佐

手拂い娘をやりて娘のさ
 花のおと躑躅のさつね
 寺のひけらら
 冬よりおはら
 一る降てあ〜る風
 里 佐 苾 里 佐 苾 里 佐

猿蓑にもれとらむねの松毛外
舟をるるりれと静なる思
水かき池のゆらりるありて
い漂行まゝはまをひら
鷺あふるやうてさうの月
つゆとにわたりてんをらる秋

佐園

芭蕉

支考

惟然

蕉心

考

血をまじひてあつたらぬの眞然
 不空を採の癖をたしめしきり
 智々事て西川をもせたり
 中園ありの杖のたれなき
 初日の白きさくやも揺る
 一きこおぞろ失てさつめら
 きたりなまきまの比の推観
 らに門あらみさの月
 蕉然考蕉然考蕉然

幼あり一畑の人のうけおると
 ぬれさるる深り小鬪
 見てあつる紀と丹を花の葉かき
 扇抜いとりよふくおき日
 さら風の又ふぬぬ比になり
 わら手に脈をちりしきり
 及年の内保をさるる居ぬ
 堂へ入るもさつとせぬ
 蕉然考蕉然考蕉然

秋山

十

大せりなほう二なるあそりの種
 考 蕉
 雪うさふ——中のうらを
 考 蕉
 まらねの葉掛を皆あふ
 然 蕉
 圃のせををよの作
 考 蕉
 酒より七肴のやらふ月にて
 考 蕉
 赤鷄江をよる
 然 蕉
 うらねのうらねを
 考 蕉
 標汗のよらとねこの
 考 蕉

毛をよらねの風
 然 蕉
 大こつうひの圃よあ申ら
 考 蕉
 来擗もよらよらしてゆ
 考 蕉
 うらぬて糸の甲を押あふ
 蕉
 けあふら油をよらけも
 然
 鴨の油のよらあけあふ
 考

十一

十一

今宵賦

野盤子
支考

今宵は六月十六日の夕々々あまのかみひまの
東方の虹山よわけて衣帯の袖あいの秋
をゆくふとれを今宵の阿そひも一先り
尊卑の席をくまひて志ハハし敵て
くまひて人そこしよ染みかして野原里
ひらぬおのきふしわたりたをほくそく
さくせんを鳥さく一先ふとれあゝ福を授

なるらよ糸のめぐもかきつた竹岸
 のさよのまじりひらひらとあまのこころ
 めもさけりらるは度は海川のまもるよ西
 舟のまもるまもるしてさよさよ
 さよさよのあひまほりて伊賀のら申す
 父母の古懐きさよさよの懐はらに
 橋組みて髪は襦袢の涼きめのさよよ
 け原かきさよさよのあまのこころ

け原かきさよさよのあまのこころ
 さよさよのあひまほりて伊賀のら申す
 父母の古懐きさよさよの懐はらに
 橋組みて髪は襦袢の涼きめのさよよ
 さよさよのあひまほりて伊賀のら申す
 父母の古懐きさよさよの懐はらに
 橋組みて髪は襦袢の涼きめのさよよ
 さよさよのあひまほりて伊賀のら申す
 父母の古懐きさよさよの懐はらに
 橋組みて髪は襦袢の涼きめのさよよ

ろくろくさく人の疑ゆるひておち入次翁
争て月由かゝめより存やすして意なき
比を阿婆由たまたまのまことかゝりし
されしを支考をひ場のさるひ何とら
おて阿翁の比をさくかゝるもおめめなら
きくを湖のあをのやうをさくかゝりし
わくれてつ川うけ阿婆ひめおちしうか
のと背をさるのいしく照るにいかしき
ら後々考の真宴何を阿くさくかゝりし

そらよ酔て移るるものあつを罰魚の翁
よめまのまさんとたをめれおひぬ

芭蕉

まのむねを酔て照りし
露をさくかゝる違の程先
雪のさくかゝる移り考ひ入て
ちき華露よ又故柳
月影のちもちうらる雪の色
志すめて隣まゐら 駕りかよ

芭蕉

芭蕉

猪子猪場の卵へ追みか
 山々ふれ多きとて
 飯櫃ちる面桶もとて
 寫て工又をささく
 おれう夏舟も猪く猪の書
 持仰のうあよ夕日さ—
 平畦の菜を蒔き—
 秋風のころ門の在風呂
 然 考 翠 蕉 考 然

馬りて旅ひぬる月の影
 尾流てつぎしもがあのちら
 麟好のこし—花をありて
 西月のく襟もあこさく
 春風の善徳のほもいくはわ
 藤く村へけらくさ
 喰うぬ音も響もこまいて
 何その町をら依よぢら
 蕉 然 考 蕉 考 然

卷の上

二六

世にほろを捧ふ付とらるるささき
 蔵こいつらと種月四く末蕉
 おおやと臨先よと川矢木の町
 陰の口およ雪り氣を然
 天つらと身とぬ酒のりはな
 云かえのふをふ一あらとら
 封付一又茶事とら月の暮
 そら一あらとらと酒の上高元
 蕉
 考

虫籠つら四糸の角の何糸所 然
 一と酒をあらとら表 一圓 酒
 今のつらと酒をあらとら酒の上
 大やな酒のこんよや中る 然
 蓋ちるる花のの籠おとをて 考
 膳うけつら一と酒の下 高

上

上

續猿蓑集卷之下

春之部 花梅

鹿沼

温ふのあつさあつさを梅

其角

覆つたに又さかたに梅

芭蕉

顔も似ぬちの白もあつさを梅

洞木

ちと通つたあつさを梅

女中

角のあつさを梅

花散てゆくらん軒のやまに花

酒堂

馬貴やうら酒名よあまのて文君

うらまも酔ひのたまひれよ思ひ

こころはこころ

酒名よあまのさきと富の花

惟然

賭みして降あまれりけりて

支考

人のまもかく霞りしを川橋

治徳

うらやめや中一のたの水面

猿雖

七川よりたるともあまは女中の

陽和

らん所おあまのうらやま川橋

乙州

咲花をさくらさくら老木の

木菫

家庭やあまのうらやま川橋

佐荷

二の殿やうらやまの鯛の臺

子珊

簾玉のあまのうらやま川橋

卓袋

田家

女若弱のうらやまの川橋

木子星

咲やうらやまの飯米又十石

柗着

一門の花のよし 木の葉より
 なるれ木の根や ぬくぬく花の露
 花のよきよき 似合世に人を流
 ともやうに 花のよきよき
 ぬくぬく 花のよきよき
 一月の花のよきよき
 八重の葉のよきよき

一桐
 如雪
 其角
 一弦弓
 卓袋
 池圃
 全

表葉

濡縁や 花のよきよき
 夕波の 舟のよきよき
 一かめの 牡丹のよきよき

光景
 曲のよ
 孤屋
 尾頭

梅 附柳

喜もよきよきよきよき
 夢よきよきよきよき

芭蕉
 野水

梅

守梅のあまひ業より野老賣 其角
 里坊も確まゝやかゝるのた 昌房
 投入や梅のわきまを流のびく 良品
 一病僧のなまぬ梅のさかゝり 曾江
 あゝ〜記^{（？）}あゝ〜梅を 万幸
 為るや梅の陰さして下駄の縁 魚目
 志〜梅やさ〜いふやあゝ〜 千川
 覆所や梅のこのあひまゝを落ん 大冊

天竺のや〜海み訪て

あまの^{（？）}や〜梅の離〜ん 遊糸
 うれ〜此^{（？）}のなりやさあ柳 千羽
 時〜さゝふようらり川やな多 意え
 ちう道を教〜ち〜や古柳 ^{に東}李由
 青梅のさ〜れ〜せや馬の曲 九之丸
 痛まうけてる海も過らぬう船 巴夫

鳥 附魚

表下

きよよせりあはは義塵ナケシく車 其角

うらひらや思ふ壩越の風はあり 史邦

きりもよと体ちりやうサカ 智月

きりぬのくサカ菊をまく 芭蕉

際垂もあサカけく雉のちうサカ 去来

まらぬやサカ養ふはかんサカ雉子のサカ 洒堂

駒さの月サカのサカやサカ山サカにサカるサカ根サカのサカ 傘下

こほサカるサカはサカきサカくサカ松サカ合サカサカ 長紅

燕や思サカをサカたりサカかつサカんサカ鳥サカのサカあサカやサカ 野臺

葉の中サカやサカあサカをサカ御サカりサカてサカあサカやサカ燕サカ 少年 峯山

雀子サカやサカ姉サカあサカらサカひサカ 雛の棧 槐市

籠サカらサカにサカちサカらサカくサカ雀サカ乃サカ子サカ飼サカ外サカ 河瓢

おサカ鴨サカやサカあサカ思サカふサカはサカれてサカのサカ儀サカ惜サカ 釣帚

サカ野思何乃儀

鮎の子サカ孔サカふサカよサカはサカ 流サカのサカ音サカ 土佐力

わけサカらサカぬサカやサカ共サカよサカらサカらサカ 少サカ軌サカ外サカ 圃水

月の影よ猫の爪は櫻屋敷の
一桐
蒲の葉やまゝのまゝくつら花
園花

猫虫 附胡蝶

よきや月よなきは啼猫の虫
探丸
うよ虫よくめてや猫の泣き
支考
おもしろくは里まけりや猫小
已百

白月志山うや

あつては翅を動かす如く
柳梅

衣の影のくまやまの鶴の舞
惟然
蝶の舞おつら様よこはる
園花
風吹よ舞のままころ小蝶うさ
あ羽 園花
まを舞して花の跡り
雪窓

春鹿

振るりや鹿屋の角
沢雄

まら耕

お弱のまらめてまらるる
木さ

苗れや三途とよ此看月お
千刈乃田をかつはなり難波人

桃 附椿

白桃や志川くもる尾のそ
金柝をさこし蓋なり桃のそ
依んくや葉の枝の上の葉のそ
梅はくく申をさるまに桃のそ
花ささるふ桃や奇舞妓の腸躍

此篇

一海鳥

桃隣

介我

雪芝

水鷗

其角

江東の季由々祖父の懐のほろろ
わのし経文題のちり白く一糸院の
光のそよめ事を

小服綿よ光をやと路玉ほそ
種を枯てし意よ花咲椿のそ
取あけてるるや枝のちそのそ
ちるは椿のそりもろそに孫てるる

角上

砂香

洞木

野波

歎冬 附脚踏藤

山吹や垣み干くそ葉一重
園枿

表下

八

田家乃人対て

山吹もあちらる糸糸解ちまん 西堂

塙おらんじり一糸株や蟻のよき 雪芝

家時や梅まよあしん糸のた 荊口

まき月

山の端まぢりく糸ぢりまき月 魯町

まき月附春雪蛙

おのつ草のたどりやまきのる 荊口

あし調子合つまよまきのあめ 乃龍

まき月や唐丸あちらるまき月 遊刀

まき月かし馬の武江の
猿店まき月あしり附

まき月や松の山くまき月 支考

まき月やあしりくまき月 桃首

まき月やあしりくまき月 風麦

まき月やあしりくまき月 風騷

まき月

九

汐子

乃ちあり枕の清涼いそれぬ夜平

去来

ふ川よ富士の影やふきおひの

園坊

雑春

出たりらやあしれ初るじ加帳

許六

あつたのやあしき舞う桐乃南

風騷

思おこのねめろくらやわり縁

土芳

うけうのや農よ藤の掛ちあし

配力

かまをたちあはのころれや那治の家

万平

あし毎に宿治やあしあし市北中

玄景

木の芽の川雀かきゆめけあ

均水

まの目や茶の木の申れあしあ

正秀

と尺の裡とあしあし申あしあ

仙化

りもあし申あしあしあしあしあ

支流

三月書

熊よあま白角賣れ名跡なる

支考

茶本目

武仙 り年

百歳

尚白

圃商

山峰

千川

え目やあやういふの

はよつらなを音かを顛倒していふ
つゆきさまたの文のちむ一はぬい

人ともぬまらや後の

明らぬのちのらに候

様ユダリのせにぬまらして

茶の味やあまのちして

茶に橋をさする

とくまらやあくはして

きん年一孫を
ちいけり

え目やあやういふの

子丹のちす川西原やまはう〜

葛平

背き〜あのおま〜も〜花の

野々

齒の葉のまよたふじ包尾の朝の

耕雪

秘の書頁のま〜まを〜ゆ日か

九板

く川まや手ま若後の白比丘を

前川

枇杷のまふのり〜分怪やぬあ

斜嶺

世の業や聲まあれともさ夷

山峰

濡いろや大あ〜けのぬ日乾

任行

え月やま〜らや〜楢のみ器

竹戸

我や白ま〜に鏡す〜るり

是楽

搦^{カキ}木や餅のや〜る花志

沾圃

虫あ〜る花目よぬ〜る花

圃角

まゝ部

暮る

暁の雲をほらとめやあゝ〜と

其の角

は〜とよん事や潮水のと〜獨

た子

ま〜と浮や何をも陰よあ〜く

角は

蜀櫻啼ぬお志は〜然然と

支考

鳴鹿のふよや時とあふ〜と

如雪

燕の居たり〜と〜とあ〜事

世に

淀よりもちか田よなけし子観

けりるる山の林麓まで

頃れり吹て通りらるる

郭らちさひの木林や中やとり

木附草花

沽圃

橙や月あつめれとるうみあつ立

園指

里しの波あうりぬき川あつら

野茨

園中 二句

け中のた本をい川に柿のた

け蒲

手切のを木も柿のたあふ外

千川

娘百合や上ありさあは殊の糸

素龍

匙山家く百合

あつちやあつちやあつちやあつちや

支考

あつちやあつちやあつちやあつちや

尾頭

冷汁をあつちやあつちやあつちや

沽圃

あつちやあつちやあつちやあつちや

イカ 宇多都

こころもや花子の心をきく

拙作

こころの心

昼もや月もや

花園

夕もや酔て

芭蕉

夕もや裸て

山人
嵐蘭

藤の葉も

妙香

薔の葉に

けし

蓮の葉も

白雲

客あらし

良品

瓜

朝露も

芭蕉

姫も

至曉

瓜

藤も

風流

子苗

系入やうる母の風柱の響の中

和歌 知七

早乙女も積んでやんまのふ

園指

母とら男の柱おくれさるる

魚目

風柱あまてやうる風の流ひ

重り

一回はくりわたりてやあのみ

少枝

里の子も燃振る子あふる

支葉

螢

段を火の燭をくちあつる

許六

と月に見るの螢を照みたり

野菰

納涼

涼しや竹揺りり萩はこい

半銭

可楽花や唐菜にわふ夕涼

唯然

涼川の夜もあつて

もよほさぬや風をよこらぬ

史邦

涼しや如も花まての強も

七侍 ちり

るぬーや裏門明て夕涼と

七侍 杜守

涼—さし半紙尾振て川の甲

万幸

漫真 三句

腰かけて申に涼—ま階子外

酒堂

涼—さや椽より足まぬ

支考

生碑をゆりさしあしう涼うな

雪芝

まじりぬま

女房屋のまじりぬま

涼風もあま—と恐れのこりれぬ

游刀

ひそか—髪申まぬけさ涼う能

全

立寄りく人よあま—れてすくく車

去来

黙神よこまら涼—やるのと

正秀

藏人の帷子こまら涼—夕まらみ

上芳

涼—さや一まら羽織の風あはる

我眉

あ涼やさしひのこまら月あま

里圃

盛る

かこまらや照りかこまら—庭の隅

野菵

木子盛るこまらあまら—の暑者外

万幸

抄

二

暮の醫者の心もあやうき
よのこころのつらさ

さきものゆきを遠くへ
凍冷の雪

正秀

取替の肉のあつさ
や梅はらひ

乙舟

蝶とらち目
藍のつら

怒風

茨の垣も
志あつぬ
目有る能

素洗

雪のこころ
や暑き
五月に
あつた

我峯

あつた
あつた
あつた
あつた

平甚

積あけて
暑き
あつた
あつた

卓登

粘りやう
飽も
おの
あつた
あつた

里東
花園

舟のこころ

昔に
あつた
あつた
あつた

可誠

志行
や
烟の
あつた
あつた

曲家

五月
雨
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた
あつた

不王

あつた
あつた
あつた
あつた

芭蕉

抄下

八

夕月もや薩^{キビス}のれぬ磯はらむ

沓園

夕立ちよとこ一人をきり自傘

拙後

夕るや蓮の葉あはれ池の^声

古蘇

夕くらやちりけり竹の皮

曉鳥

仲のまに傘のらさぬやまつ所

圃水

夕

夕るや中房りて縁のあつ

正秀

夕のよとてきりけり草の

胡故

森の障涼しよぬやほつとあつ
縁中やぬの撒る空のまきけり

乙州
稜鳥

夕

池の月や潮こちりては津路

筆塔

雑

夕を懐てよの動やせり團こな

秋風

夕の響ふる葉やちりや寺に烟

荆に

夕渡も糸くひの申のちりけり

知真^{一七}

うと園位を——のめりやせ
林蔭を二方様とありのれて平田
渺しと思ふも老杜の唯を
ののこちうせしむもつちんちん
へ——此等の棉をけささるる
々属の——をちりり今
この心所の一篇は後世に月乃
うらせしむさちんちん
ちんちんちんちんちんちん
らたよはしむるの月に陰ありて
回りの心所——の心所を

き前の寂寞をちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちん

支考評

名月の海より冷ら田葉う船 酒堂
明月やあよあれを鶴居のつき 如行
ものしんねん月足み 秀信

巻下

巻下

梅の影をいかにかきこむ月の

智月

名月やもろの陰を人のけり

園指

明月やふ斜より死やまると客

浮雲

明もや一歩欠けら陰もなし

不玉

中切り梨よまのほく月

配力

名月やまのくくくくくくく

花柳

明月やまのくくくくくくく

圃水

ねくくくくくくくくくくくくく

山峰

明月やもろの影をいかにかきこむ月の

風国

名月やもろの影をいかにかきこむ月の

需笑

老の影をいかにかきこむ月の

重女

明月にわくくくくくくくくくく

泥芥

いさよのらぬよありてかきこむ月の

二足まで居地も川ぬら月見

支考

艾子府と畑までりかきこむ月見

空牙

柿のふれ又助とたよ月見

如真

山も花も山も花も山も花も山も花も
宇比

名月や里のあぢのまきと果
木枝

場に居て月をさしや遠様
利合

明月やあしわかしと女中方
丹楓

明も何ゆあらはにおの道
野萩

船入乃客よまはさる月見
正秀

信川のちかこよ
なまらうて

舟引のたあこあけて月見
交子

待宵の月に床一や空物御
景桃

家よと老女とあまありに父
お監り秘してはくは
おねとひあて

姨捨を

園よのちちやりの
依圃

露おきて月入あぢや嫌の
馬鹿

草うら月あさあぢ
里東

月影や海の音やうも
牧童

深川の果ふなちをひみ所よ
糸をききーて

川ささくらの川きもや月のな 芭蕉

十六あをりしうに園のあか 全

さよひの園のるもやういふは 猿雖

七夕

うめあやの海のうのあ海のは 惟然

早合まうとまて終る朝し守 啼多

船飛のやうさういふあ一の乾 東潮

ふたしむいむらうさうおよさういふ 依園

おねの薫姫の園もら 乙州

立秋

あまぬらやなふはなはとねの 露川

あし川の中よあさくやにま 左次

編み

おのろの花透るあは桔梗の形 極梅

あしにもちあぬ桔梗のつらみ 佐友

七

五

子らきたれひぬ馬骨の筈少
 濁子
 まさたれ一羽後の杖うめくね
 馬草
 一筋きつた風よちりり 烟を
 鳥栗
 弓固とる比たれやなまうらぬ
 支浪

贈芭蕉

百合をこも葉ををける余も
 風麦
 けり姫のちやうもはしはし
 史部
 枯のちやうもあそおうや鶏頭
 万平

鶏頭や厚の暮る時わらわら
 芭蕉
 鶏頭の暮るをきくぬ月影
 至曉
 折しや西風にまはれ秋の
 雪
 苔花もあやみく足動く秋の
 荷
 山人のふかきまはれ草うら
 加賀の
 楓
 風母よ長くうらぬりの
 杉下
 朝顔の世をわき入る月お
 甲上尼

あつちの遠くへてきくはくねる
ふらふらあつちの遠くへて湯の舟
朝風にまをられ一人や笠帽子
其角

虫 附鳥

さあ——此傍に経る可南
電馬やぶらぶらくねる棚
火の宿て胸すまふり虫のあつち
秋のおやまも新とまをりす
このまや飛ぶ如命一月の影
杜若

磯の石の何の味ある草の先
襦袢や股をきりやうるのと
蓮の葉に揺るさうらん様の
めげあつちよちひて死る秋の
鳥よにゆたか浦の音なり
鶴鴉やきりまはる川原
葉の粒まをるあつちや啼鶴
若のふれあつちのきりて四十雀
探丸
葛帯
示峯
大子
馬寛
氷固
支考
芭蕉

穉風

秋の勢也二書なるは穉の時
 雀子乃盤もは穉の風
 何なりやあはうし穉の風
 秋のまよも穉の風
 ちのしんしん年のまよ穉の風
 留んしんも穉の風
 あれしてまき海は穉の風

遊刀
 式之
 支考
 風園
 圃燕
 九そ
 猿雛

穉妻

独り守る守りの穉の風
 穉妻也るる穉の風
 穉の風穉つは穉の風
 穉はまも穉の風

一東
 宇比
 土世方
 芭蕉

木實 附南

園の木のまよて穉の風
 炭焼にほ掃たのまよ

為有
 玄虎

秋の初日おろる尾掃のりり 酒堂

はぬしとて舞をもちて梅の枝 香露

も川草や垣の影は一し盡 依圃

伊勢の山申ふ河原の 宇治を結して

松草や起るらるるの形 惟然

中山草やまきぬ木のおのゝのふり 芭蕉

楓

後居の塙よとれり村のまゝ 小鯉

麻

庵すちにおのの庵や海の方 風睡

斎草のよと麻おとる守りよ 一敵

農業

起しはしを迹りりさるまの 車扇

木の下に程やらぬ種魚の形 買山

さほしげらるるものあはれ 時雨 知雪

雨のし後よ
うらまひをたづねて

芭蕉 芭蕉の妻をかくるてめてたはら
 乃龍 早稲刈て落つふらや百姓
 斗從 山雀のやまもつん
 支考 在りよるに河ふ鷺ヒナもつ
 全 一おののやまや平らとんや
 惟然 肌をい始よあり
 本多 百ちりていりおそ唐か
 占園 そのはらや
大御所ふもあそひて格次と
つたよのへ後よあひら

菊

葛草 二百年二百十日七
 溜子 あつちいもやと白菊の玉牡丹
 支考 者木綿の糸にき
 兀峯 野益屏
 支考 すういもやあつちい
 支考 借りけ
 支考 暮秋

唐の匠や背負うて海を秋の暮
し秋を鼓らうの糸の恨る船
おあまのちよきをあらけらう葉の
芭蕉

雜稿

又六十海をほのめて殺^{ハセ}つ
る葉かゝれぬやまの松の中
あゝ鷲の啼きあつたおきくま
ある故や忘れぬ時ある秋の雨
団友
畦止
はな

あゆむいかに霞のさちちと
ららおや掃くぬさぬの葉あ
柿のこぼれた焼くと葉くん尾著
いふる馬の密に骸骨や
の笛鼓をりよめて舞はる
やまを盡して舞臺の燈
くまのりあつたにけらあり
くまのりあつたにけらあり
よ舞はんやかの體舞を
や〜て舞よま〜ら
万幸
葉門
宗波

平押よみなる回らもろ付るなる
 葉賣やらくもろの葉廻り
 梳賣もよよ葉廻のぬ付る
 元鯉のもてまろいぬ付る能
 うららおや鏡もろろ一うら
 ゑよきて唐野まぬら付る
 柿包お目おもたろ付る
 うららろもろれて里を藤付る

野明
 園指
 宮牙
 あり
 鶏口
 野萩
 霞川
 里圃

沖西の能目ろりお付る能
 うららおやちのおろけの能
 うららおや一もろしれと能の能

佐圃
 水鯉
 支考

元禄辛酉くぬえく
 九月あま室と園と遊

午留の能をまお付る月つりぬ
 まろけけらちあまそのはえら
 うららろもろもかろらと能も

三十一

あつて付外を傷と云うはた言
めあつてうけを展重物のめは
たふとくもあつてはさちを
あつてはつてくさすあつて
れらるまよあつて

芭蕉

三葉のまやこをよ切らるる後の産

柚の色や起あつてらるる葉の葉

其角

三葉の氣味ゆるく境や萩の
中

柳橋

八尋のまやあつてらるる葉の産

沼圃

何處のまやにまゝ三葉の枝

魚沼

三葉富字の圓をまゝにり

馬寛

三葉の陰土可くはりのめを
まゝあつて三葉の輪のちりんま
あつてあつてまゝもくもくはな
まゝあつて三葉をまゝあつて
まゝあつてらるるまゝあつて
はつて三葉をまゝあつて
まゝあつてらるるまゝあつて
まゝあつてらるるまゝあつて
あつてあつてらるるまゝあつて
あつてあつてらるるまゝあつて
あつてあつてらるるまゝあつて
あつてあつてらるるまゝあつて

三十一

うら—とぬ翠や作ぬ翠のな

幸の堂

草

みねや珠幄の如く月の透り

曲翠

たけは清く咲や雪あらの氷は花

氷固

みねのつたの〜ぬや蘇屋のき

惟然

花録 趙南のり〜

山家集の題よ〜

一落も〜ち〜ぬ〜事の水〜南

芭蕉

山〜家〜花〜き〜え〜り〜開〜く〜ゆ〜り〜花

車廂

み〜梅のち〜山〜梅〜山〜也〜鳥の

土佐方

山〜家〜花〜も〜落〜て〜や〜雪〜は〜花〜の〜様

露笠

木〜家〜山〜州〜冬〜枯

お〜い〜た〜木〜の〜ま〜ら〜く〜お〜花〜の〜

依徳

日〜生〜ま〜ん〜て〜江〜の〜甜〜ち〜〜山〜家〜花〜の〜

露沾

冬〜川〜也〜木〜の〜ま〜ら〜く〜山〜家〜花〜の〜

惟然

山家集

三十一

梅雨より足さりのりあつたあのみきり
枳風

いねのつたよりの
なまこめりて

とつらより先かてつらなまこめり
一道^{イセ}

枯たつてつらなまこめり
杉風

牛のけ返る枯のつら
柳醉

冬枯れまこめり
乃龍

春枯れまこめり
利半

即ち枯てのつら
支考

木かすやまもつらなまこめり
智月

風や背中つら
風行

木枯れ刈田のつら
惟然

こかすやまもつら
塵生

夷講

よひす痛酢賣み袴
芭蕉

よひす痛袴もつら
利合

本巻下

鳥 附いま

乃々の海まこと

塵埃よりぬくぬくもたし 浦島 白空

追々して遠くくもふ 千もりの車 葛葉

かおらんとて 庚申中し死なむ形 木草

入海や碇の釜に啼 千もり 扇指

驚^{ケニロモ}れはくくくぬく 鴨乃豆 芭蕉

く川鴨をた追うくくはくくく水 乍木

枚はよろろい入つふ 土風麗々 利雪^{三人}

くくくくや海月よあつたあつた 車角

くく透れ子持ひあつた水 付水

一垣よま川白魚や雪の前 杉風

かくぬくや脈をたして降露 拙作

杜夫魚を河豚の大ききそそ水よはふ
新の川よのくあつたをやう

冬月 附余

喰ものや門賣ありくぬの月 里圃
 あ〜猫のわけもた軒やみの月 夫字
 何まも藤乃ろまてちり紙ぬす海 川春
 の包や行きぬれま江の月夜 支考

埋火

埋火や寝るま客の歌布〜 芭蕉
 佛〜さるゑあゑ志を寝るゑ火燈り燈 桃先
 自由や月をぬかり玉火燈 同本

雪

ぬき物にに摺あり夕アろろ方 其角
 朝〜花月ろろすま酒の味 全
 雪あ〜れ心の〜ろろなま〜い 冬象
 熊鷹シノカの〜ろろ〜ろろ〜れ雪 祐甫
 雪垣やろろぬろろろろの〜 菅原
 ぬ〜ろろの〜ろろ〜ろろの〜 支考
 片寝やろろ寝あ〜ろろすま〜 俵 圃吟

馬をくらの毛をくちや月枝のおゆ
髪を利を降きあうきくらのけ
伊加え大和をくちる山や雪のた
大守
陽和
配力

神樂

お神楽に萬と冷きおまを
史邦

御きくよ

今更やうちくくちの降お
体もくち干鉢賣をすちり
娘入のりもくち降きくよ
痕を送りくちり餅ちくち
路平
馬見
許六
匠圃

煤掃附辭

煤をくちや嵐込めを獨の中
煤掃やあはゆよかめくちる
やまを隣のかくち煤をくち
孫香
黄逸
米瀧
馬見

蝶々もやうにふれてゐる評ち

同知

煤掃地折る一牧疏

唯然

餅つふや火をかいてち男を

伏水

餅はあやあうとてうら鶏の

嵐家

ゆら搗の手傳ひとあや山伏

馬佛

歳暮る 附るまの衣配

こゆる尾返も酒きの市のうら

角屋

内砂やあきてまをすの洗ひ髪

里東

賣るやとてもあやうのうら

草土

猿もあよのちりあやうのうら

車末

大やや款子きとてあやうのうら

万手

袴もぬきあやうのうら

孝由

年の市位きあやうのうら

其角

おとちりあやうのうら

正秀

川流あ一はあやうのうら

狹子

桶の輪のあやうのうら

猿雖

天鵝毛のたぬきあての

唯然

後扱又筆を強めて

けら名圖司呂丸うぬきあての

のちろとて伊勢もあつてはら

このやのまぢい

あて今きたよ

くまの

盗人のあてのあつて

芭蕉

余所よもてかたの

支考

漸に

土芳

高白

高白

桃後

桃後

山峰

山峰

利合

利合

雑文

小原風に糸を挽うら

斜山履

拙作の何風を母

土芳

井のあつてあつて

木下

仙杖
 土龍
 雪堂
 二谷
 法圃
 杉風

新教之部 附 追善 哀儀

涅槃木

涅槃像ありよき身も圓の
 孫とん念や 般手合る 瑞彩の
 山寺や 猶守る ねをせ 像
 貧福のあしと ぬきとる 涅槃像
 法圃 芭蕉 不撤 山蜂

権佛

確仙やほろーちる好る井三の
家花や仰うまれて二と月
確仰や親迦と程安を従弟に
之道

云思祭

冷おとこな水とほー課あり
平保るわのあこしやうき課をふ
やは体や坊とひるをふとふ
嵐
去来
佐圃

甲戌の夏大陣よ侍をこの

かしの...
老四里よぬして...
定心...
芭蕉

悼少年 二首

うや...
その親をきりぬ...
支考

首の...
木

...

...

さくら木 糍垂れやと皮桶の水 支那

佐敦傳

柚も柿もおうすれめなり 佐敦傳 法圃

臘八

腸 ささくろりてんれを納豆汁 許六

何のあれかのあまじりめを大呼傳 如行
雜記

隆平の真如堂に

善光寺如來開帳の時

涼しくも野のよもはなほなれ 去来

みまもかきまこ二ふさき けり の花 知月

り 畑や家ま川まりそは在世 乙州

まのふに川遊向ふ物富まあり 多野

手まき 朝の月涼 野坡

食堂に雀啼 たり夕時 支考

旅く部

送別

え禄七手のまゝとてあまの
あまをんはつりて

まぬくに群居のん世のふく程

荷号

つのもや柿喰ひあひつちのよ

惟然

許六う

木下海におまゝの時

旅人のちゝははも似よ推のた

芭蕉

留別

倍の惟然う空あり

古舞のゆき付

嵐やうもやまの草むらさき

文子

鮎の子にまじりて魚送るふのけ

芭蕉

甲斐のこのぬよのけ

うづ那のふらたからん

年ありて牛に乗りてまじりて

木石

舞つは内は世をまじりて

越人

みくもなしくつるうづ那のけ

野狂

ちの國のぬよのけ

うづ那のふらたからん

ろにまじりて谷にまじりて

る

十圓子の小はぬよのけ

許六

大名のちのけ

全

うづ那のけ

うづ那のけ

魚

はまのけ

猿

明木のけ

我

おろしほをきておはあり 糸の馬 史邦

田園の心も一も閑しく作務の
こゝろもさうす

文書のの庵ちりけを秋涼 立人 呂丸

我南園つきの旅の庵と程 佐圃

常陸の園が一もひとりの新の
おもしろてやとりせんとも一と
そのおもしろはあまたあつてちかき
うらやまをさしお別れの軒の
下におもしろ

椽のちりけや梅にせは粥 支考
と川魚や道よさうか 全

え禄とまのめくも海の家あり
あり武のよおもしろくとて海
の驛 ちかき一もさうす

宵わけて名をわいのさうす ちかき
ちかき

續猿蓑を芭蕉翁乃一派乃す
海人の機をいふもさきくはるは代の
情伊賀とせむる乃見松尾ふり
此評子あり某二巻からせし字を録して
漸くうまのむら本すをあらえん
せふ廣あつるをゆるし給り書中
或いふ言けしあるいふ入ふれおな
くはらはる年福のすむしあり

一子...
乃書...
とふ...

之福十一頁

子日...

かん...

正...



